



どんぐり

No.51



兵庫県立

南但馬自然学校

HYOGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

(Nature Education Center)

身近な山や川



兵庫県立南但馬自然学校

副校長 足立 宣孝

山や川は本当に身近な存在だった。

小学校の頃、裏山には栗の木があり、松・杉・檜や広葉樹も生えていた。いわゆる「里山」で、炊事や風呂焚きのための「こくば」（枯れた松の葉など）を集める場所だった。栗拾いもしたし、秘密基地づくりのための遊び場、鬼ごっこの隠れ場でもあった。春になると、土手でよもぎを摘んできて、よもぎ餅にしてもらった。谷川沿いに「イッタンドリ」（イタドリ：「すかんぼ」とか「かつぽん」とも呼ばれる）が生えて、それを食べるのが楽しかった。手で簡単に折ることができ、ポンと

いう音をたてて折れた。

川も身近だった。魚釣りの場であつたし、学校にプールが出来るまでは水泳の場所だった。鰻が捕れたりもした。

秋には、裏山に松茸取りによく行った。里に近いところでも、当時は結構たくさん取れた。

中学生の頃は、のこぎりや斧で、薪割りをするのが好きだった。自宅近くの山から倒木を切り出してそれを一定の長さに切り、斧で割って薪にするのだ。家の手伝いの中では、なぜか熱心をやった。その当時、我が家ではお風呂を薪で沸かしており、それなりに大切な仕事であつた。母親や祖父母には、力のいる仕

事だったので、随分感謝された。それが嬉しくて、調子に乗ってよくやっていた。ダイオキシンの発生が社会問題化し、木材を燃やすことも周囲に気兼ねをするようになった20年前、石油ボイラーの温水器に切り替え今日に至っている。

今、その山は荒れ放題である。自らが所有する山がすぐそこにあつても、ここ何年も山に入つたことはない。昔はあまり人里近くで見なかった鹿が山からどんどん出てきて、農作物を荒らしている。3年前の23号台風では、その山から大水が出て、谷川は土砂で溢れ、大きな災害になった。人の生活に最も身近で役に立つ存在だった山や川が、日常生活からかけ離れ、災いをもたらす存在になってきた。人間がより便利な生活を求めて来た結果だが、もう一度、身近な山や川、自然を見直す時期に来ているのではないだろうか。

今年は、兵庫の自然学校がスタートして20年目である。節目の年に、自然学校評価検証委員会が設けられ、その成果と今後

の課題が評価、検証された。その内容は、リーフレットに取りまとめられ配布される予定である。

また、今年2月、文部科学省から新しい学習指導要領の改訂案が公表された。その中の6つの教育内容の主な改善事項のひとつとして、体験活動の充実があげられている。具体的には、「子どもたちの社会性や人間性をはぐくむため、その発達段階に応じ、集団宿泊活動や自然体験活動を重点的に推進する。」というものである。このことから、兵庫県が20年前から進めてきた1週間の長期に及ぶ自然学校推進事業が、先見性のある事業であつたことがよく分かる。

自然と日常生活がかけ離れた存在になってきた今、今後の20年を見据えて、兵庫の自然学校推進事業が、山や川などの自然を少しでも身近なものとして感じられる貴重な自然体験活動になってくれればと思う。

平成19年度の 自然学校を終えて

兵庫県立南但馬自然学校

主任指導主事 芦田 哲

本年度は、74校が本校を利用して自然学校を実施した。4月23日から受け入れが始まり、最後の学校は12月8日に自然学校を終えた。それぞれの学校がそれぞれのねらいを設定し、ねらいを達成するための様々なプログラムを考案し、活動を展開していた。

自然学校実施前から児童の実行委員会を立ち上げ、プログラムの立案から参画させていた学校も多かった。入校式の時、話をあまり聞かず返事をするのも数名という状態であった児童たちが、自然学校の様々な活動を通して、退校式の時には、話を聞く姿勢も良くなり、とても大きな声で返事をするようになったという学校も多く見られた。指導者が自然学校のねらいを明確にもっており、そのことが児童にも十分に理解されていた結果であろうと感じた。教員と指導補助員の協力体制も様々である。意思疎通が不十分な学校もあれば、教員と指導補助員の役割分担が明確であり、互いの共通理解や連携が上手くできている学校もある。児童は、そのような雰囲気も敏感に感じているものである。児童が意欲的に活動に取り組む、「もつと南但馬自然学校にいたい。」と言っている学校があるかと思えば、児童が活動をやらされ

ていると感じているのか、大半の児童が「早く家へ帰りたい。」という感想をもらす学校もあった。教員が自らも楽しみながら自然学校を進めている学校もあれば、過密なスケジュールをこなすだけで精一杯という教員の姿を見受ける学校もあった。自然学校を単なる学年行事として考えている学校もあれば、教育課程にしっかりと位置づけ、事前の学びを自然学校で深化させ、その後の学習に発展させている学校もある。5日目の夜に振り返りの会を実施し、自分がやり遂げた満足感や友だちと寝食を共にして生まれた心の絆、様々なことが頭をよぎって泣いている児童の姿もよく見かけた。退校式後に、指導補助員との別れを惜しんで泣きじゃくっている児童のいる学校もあった。この学校には、指導補助員が3名いた。リーダー格で、常に児童の前に出て指示を出している補助員、児童の悩み等の聞き役を担っている補助員、常に明るく児童に接し、良き雰囲気づくりを担っている補助員の3名であった。リーダー格の補助員が多いたるの良いが、補助員の中で役割分担が明確になっている学校の方が、児童に良きサポートが出来るように感じた。

たかが5泊6日の自然学校で児童が

変わるはずがないという声を聞くこともあるが、私は、良き自然学校であれば児童は変わり大きく成長すると考える。5泊6日の一日一日の積み重ねの中で児童が変わっていく場合もあるが、一つの活動で何か児童の心に大きく響くことがあり、変容する場合もある。様々な利用校の様子を見てきたが、

5泊6日の自然学校を実施するにあたっては、教員や指導補助員の労力は並み大抵のものではない。だからこそ、私は、「実り多い自然学校になった。」と言えるようなものにしてほしいと願う。自然学校も授業と同じであると考える。導入で児童の興味・関心や意欲を高め、展開でねらいに迫るしつけや工夫を盛り込み、まとめて学びを確かめたり分かち合ったりするものである。当然、事前の学習を受け、事後の学習へと発展していくものである。自然学校に限らず、多くの学校行事もそのような流れで考えていただければ、効果も大きいし、マンネリ化の打破にもつながるのではないだろうか。

ある学校の入校式で、教頭が「ゴミが落ちていたら、まずそのことに気がつく」ということが大切である。さらに、気がつく子どもは、そのゴミを拾うであろう。みんなにも、そんな気持ちを持たせずに自然学校を送ってほしい。」と挨拶されていた。後で教頭に伺うと、「学校でも同じようなことを子どもたちに言い続けており、職員もそのことを大切にして教育にあたっている。5年生の児童は、全体では良い力を発揮するが、個々になると弱い面がある。」とのことであった。児童の様子を見ても、話をしっかりと聞き、返事もしっかりとできていた。教員の共通理解がしっかりとできており、その願いや

ねらいが児童にも十分に伝わっていることの大切さを、私も改めて感じることでできた。教員の協力体制や意思疎通がうまくできている学校は、児童もよく育っているように感じる。

自然学校のねらいを明確にもち、そのことを教員が十分に共通理解できているということは大切なことであるが、そのねらいに迫る活動をいかに本校が提供できるかが重要なことであり、南但馬自然学校の最も大きな役割だと考える。本校でよく実施される活動は、キャンプファイヤー、野外炊事、自然物クラフト、朝来山登山、基地づくりである。施設外では、ヒメハナ公園や竹田城跡へのサイクリングやハイキングである。本校では各学校の様々な活動に対応できるように可能な限りの備品等をそろえているが、提供できるプログラムは、一般的な汎用性のあるものが中心となっている。ハード面では、大変充実しているが、肝心なソフト面に少し弱さを感じる。学校独自の活動として例をあげると、講師を招聘し、山の環境について話を聞いた後に、登山に出かけた学校があった。ツリーイング、地域環境調査、染め木、段ボールオープン作りを行った学校もあった。これらは、全て利用校の教員が考え実施したものである。入校時、多くの学校で実施いただいている施設内オリエンテーリングは、本校が作成したものであり、大変好評である。また、檜の間伐材を活用した「ひのきホールダーづくり」というプログラムも開発し、各学校に紹介している。今後も、継続して独自のプログラム開発に努め、利用校のニーズに応えられるように、ソフト面の充実を図っていきたい。

小野市立市場小学校の自然学校

兵庫県立南但馬自然学校主任指導主事 芦田 哲

小野市立市場小学校は、7月9日から7月14日までの間、本校を利用して自然学校を実施した。市場小学校のプログラムは、私が今まで見たことがないものであり、こんな自然学校も可能なのだと強く印象に残っている。そこで、今後のプログラム作成上の参考としていただきたいと考え、活動内容等を紹介したい。市場小学校は、普段の教育活動でも環境教育に重点をおいた様々な取組を実施しており、特に5年生では、「水」をテーマとした活動に取り組んでいるとのことであった。自然学校のプログラムも、そのことを柱にしたものであった。特に、担任は、自然学校を通して児童が力を合わせて最後までやり遂げることを大切に活動出来る限り多く体験させてやりたいという願いを強く持っていた。5泊6日の天候はとても悪く、毎日雨が降り続き、計画していた活動を実施するには適した条件とは言えなかったが、以下に市場小学校の具体的な活動内容等を紹介していきたい。

1日目 11時過ぎに入校式を済ませ、午後からは早速活動開始である。まず、火打ちがね製作を実施した。その後、火花を出すための硬い石を本校敷地内で探したり、まいぎり式の火おこし器で火種をつくった。本校では、火種を大きな火にする時、麻紐をほぐしたもので鳥の巣状の火口（ほくち）を用意してもらうことが多いが、市場小学校は、タオルを燃やして灰になる前に消した炭状のものを火口として使用していた。この方が、火種が長持ちするとのことであった。夜は、雨のため、キャンプファイヤーを変更してふれあいゲームを実施した。このゲームが初日のキャンプファイヤーで意図した児童の緊張感をほぐす手立の良き代替プログラムとなっていた。

2日目 この日の活動は、ランプシェイド作りである。粘土で形を作り、乾かすのである。前日に作製した火打ちがねで火をおこし、粘土を焼いて冷ませば完成である。この日も、雨だったため、場所をファイヤー場から大屋根広場に変更して実施した。大屋根広場にあるキャンプファイヤー用の炉やバーベキューコンロを利用して粘土を焼いていた。残念ながら、本校の敷地内には、この活動に適した土がなく、粘土は持ち込みであった。その後、簡単なゲームを行い、緊張感の後の気分転換を図っていた。

3日目 野外炊事を実施した。まず、火打ちがねやまいぎり式の火おこし器を使っての火種づくりからである。その後、各グループで選んだ4つのメニューづくり（即席ラーメンのあんかけ、鶏肉のコーラ煮、お茶漬け海苔のスパゲティ、じゃがいもを使ったお菓子）に挑戦していた。講師には、生涯学習サポート兵庫の山崎氏を招聘していた。その後、翌日に実施するアドベンチャーツアーの説明を行い、夜には、グループごとに分かれて、ツアーの最終打ち合わせを行っていた。

4日目 この日は、5泊6日の自然学校で一番中心となる活動、アドベンチャーツアーを実施した。4つのグループに分かれて、但馬の名水や日本海の海水を採取しに出かけた。徒歩の班もあれば、電車を利用して遠方まで出かけた班もあった。天候は、あいにくの雨であったが、どの班も、無事、名水等を採取して帰校してきた。ハイキングなら中止していただろうが、目的が明確であったからこそ実施でき、さらに児童のモチベーションが十分に高められていたからこそ、雨の中でも頑張れたのだと感じた。

5日目 前日に採取した名水と海水を使って名水ドリンクバーとおにぎりパーティーというプログラムを実施した。名水を沸かす、海水を塩にする、炊飯袋で御飯を炊く、沸かしたお湯で飲み物作り、おにぎりとお水でパーティーという流れで実施された。学校長の乾杯でパーティーが始まった。夜は、うりぼうの森（テントサイト）でランプシェイドに火をともし、振り返りファイヤーを実施する予定だったが、またまた雨天だったため、場所を工作室とその下の階にある研修室で行った。工作室では、全員で今までの活動を振り返り、その後児童が一人ずつ研修室へ行き、先生方の前で今後の意思（決意）表明をした。研修室の中央部には、火打ちがね、まいぎり式の火おこし器、名水を採取してきたペットボトルなど、思い出の品々を積み上げた立派なお宝が置かれていた。児童全員が、感極まって泣いていた姿がとても印象に残った。

6日目 最終日は、「使う前よりも美しく」を合言葉に生活棟の清掃を終え、児童たちは5泊6日の思い出と今後の自分の目標を新たにしてお別れし、退校していった。

自然学校を教育課程にしっかりと位置づけた流れのあるプログラムであり、安全面にも十分に留意して実施された自然学校であった。悪天候のため活動内容や場所を変更せざるを得なかったが、毎日、夕食時に食堂前で実施していたその日の活動の振り返りが、この5泊6日の活動を支えていたように感じた。何よりも、自然学校にかかる市場小学校の先生方の熱意が、児童に大きな感動と成長をもたらしたのではないだろうか。

平成19年度の自然学校

～実施報告書から見えてくること～

実施報告書について

対 象 南但馬自然学校を利用した学校

内 容 ・各学校が自然学校のねらいとしてあげたもの（7項目から複数回答）

・ねらいの達成のために計画、プログラム、学校支援ボランティア等で各学校が取り入れたもの

・成果や課題、全体的な感想

1 各学校における「自然学校のねらい」

(1) 「自然学校のねらい」の特徴

・各学校がねらいとして取り上げたもので、特に多かったのは

- ① 集団生活を通して協調性を高め、おもいやりの心を育てる。 (98%)
- ② 自主性・主体性を培い、判断力を身に付けさせる。 (75%)
- ③ 自然に対する興味・感心を高める。 (73%)

(2) 「自然学校のねらい」から見えてくる課題

・協調性や思いやりの心を育むことをねらいにするならば、活動後の個々の振り返りや友だちとの分かち合いの時間を設定することが大切であるが、その時間をプログラムにきちんと位置づけている学校は少なかった。

・協調性や自主性等を育むためには、活動単位の工夫が大切であり、全体・グループ・個人のどの形態で実施するかにより効果も違ってくる。

・自然に対する興味や関心をねらうのであれば、児童が様々なことに気づくために教員がどのような仕掛けを行ったかが重要である。

・健康増進や感謝の心等を育むことをねらいとしている学校は、20%以下と少ない。活動を実施する基本が心も身体も健康であることと振り返りの中で個々の状態を確認することで友だちへの感謝の心もでてくると考えると、やや少ない数値である。

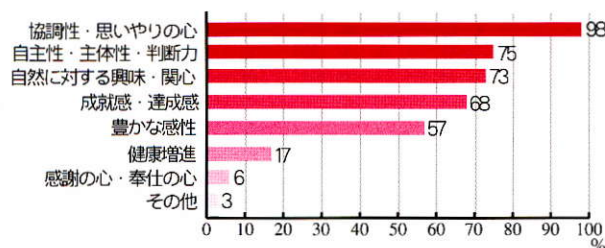


図1 自然学校のねらい（複数回答）

2 各学校のプログラムデザインから見えてくること

(1) プログラムデザインの特徴

・各学校の取り上げた活動で、特に多かった活動と具体的な報告から

- ① ゆとりのある滞在型の自然学校 (68%)
 - ・本校に6日間滞在し、一日1プログラムで一つ一つの活動を最後までやり遂げ、自分や友だちの良さ、持っている力を再発見させるよう心がけたため日々の児童の高まりが感じられた。
- ② その後の生活と関連づけた取組 (62%)
 - ・帰校後、自然学校を振り返りまとめた内容を、4年生に対して発表した。自然学校の準備段階からできる限り児童の願いを尊重したため、一つ一つの活動が充実し、よい発表ができた。
 - ・草木染めで作成したハンカチを音楽会で使用した。

③ 選択型のプログラム (54%)

- ・思い出を作品にした工作（焼き板、ストーンペインティング、木工クラフト、落ち葉のラミネートアート）
- ・興味に応じての活動（森で基地づくり、川遊び）
- ・選択フリータイム（竹細工、登山、虫とり、石の文鎮作り）
- ・チャレンジハイクや野外炊飯での選択メニュー

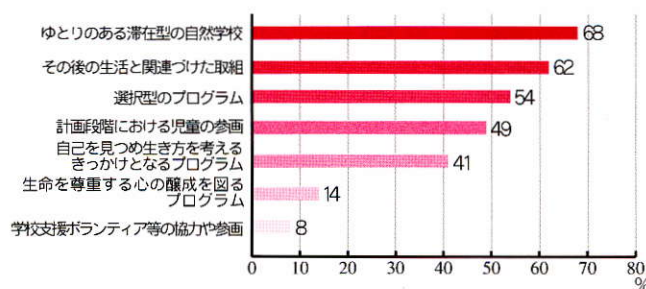


図2 自然学校のプログラムに多く取り入れられたもの

(2) プログラムデザインから見えてくる課題

・ゆとりあるプログラムを意識している学校が約70% (50校) であるが、下見打ち合わせの時に持参されたプログラムを見ると、過密なものが約18% (13校) であった。

・選択型のプログラムを取り入れて児童の自主性等をねらっている学校が約50% (40校) であるが、児童にとって嫌いな活動から逃れるための選択型になってしまっている学校が約4% (3校) であった。

3 今後の自然学校実施に向けて

- (1) 活動実施においては、教師が「しかけ」をしないと、ねらいを達成することは難しい。五感を働かせるとはよく言うが、臭覚、味覚、触覚については意識せずとも感じるものである。しかしながら、「聞き漏らす」「見逃す」という言葉もあるように、視覚と聴覚については意識しないと感じないものである。自然豊かなフィールドに身を置いても、視覚と聴覚を働かせるための教師の「しかけ」がなければ、子どもたちは様々なことに気づかないのではないだろうか。
- (2) 失敗そして試行錯誤、話し合い、振り返りを大切にするためにも、ゆとりあるプログラムを立案することが大切である。そのゆとりの中にこそ、子どもたちを待ってやる時間が生まれるのではないだろうか。
- (3) 活動に、子どもたちが工夫できる余地を残すことが大切である。兵庫県教育委員会発行の「指導の重点」においても、「体験的な教育活動に児童生徒の発想や主体性を十分に生かすよう工夫する」と明記されている。
- (4) 活動を終えてすぐに次の活動に進むのではなく、体験を通して気づいたり発見したことを振り返り、そのことを共に体験した友だちと分かち合うことにより、学びを深めていくことが大切である。

平成 19 年度

県立南但馬自然学校における傷病発生状況から

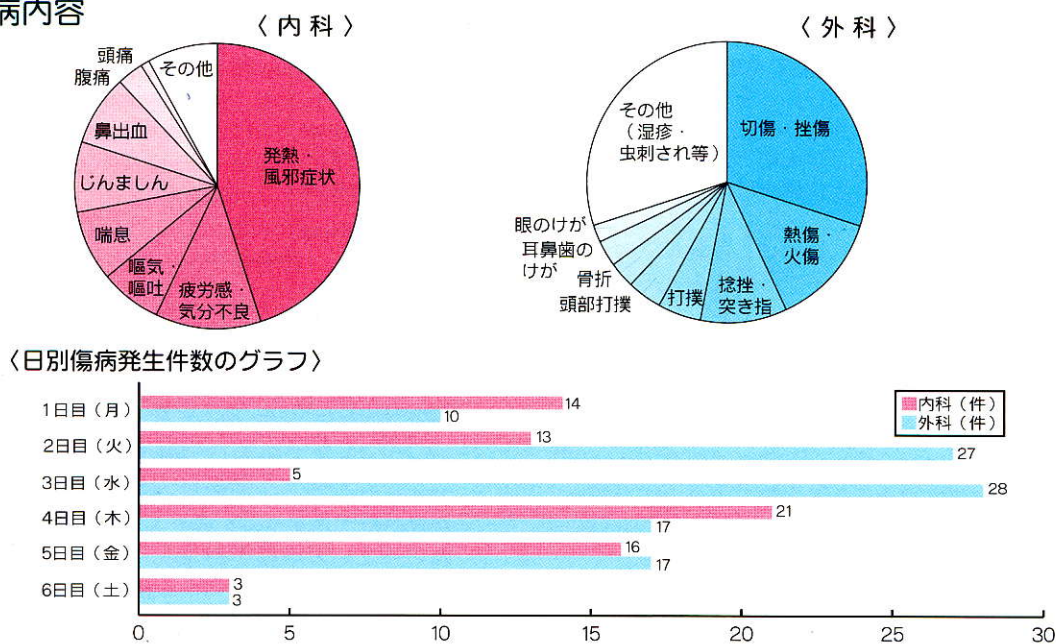
1 医務室処置及び受診状況

	医務室処置			受 診		
	内科的	外科的	合計	内科的	外科的	合計
H 19 年度件数 (件)	72	102	174	40	38	78
H 19 年度発生率 (%)	0.3	0.4	0.6	0.1	0.1	0.3
H 18 年度発生率 (%)	0.5	0.4	1.0	0.2	0.1	0.3
13 年間の平均発生率 (%)	0.9	0.8	1.7	0.1	0.1	0.3

本年度の医務室処置件数は、内科が著しく少なかった。疲れ、風邪等で発熱する児童や季節の変わり目等に体調不良となる児童が少なかった。その要因として児童の疲れを考慮してプログラムを調節したり、出来るだけ一日1プログラムにしてゆっくり過ごせるように、計画段階から各学校が配慮したためと思われる。

※発生率は処置件数を利用児童延べ人数で割り、算出した。

2 傷病内容



3 傷病記録より

- 傷病の発生件数、及び受診件数を実施日別に見た場合、内科では4日目の木曜日が一番多く、次いで5日目の金曜日、1日目の月曜日、2日目の火曜日の順となった。その理由について考えてみると月、火曜日は来校前からの体調不良のための受診が多く、木曜日は疲労や風邪等の症状の悪化、喘息などの既往症によるものが多い。自然学校が始まってからの体調管理はもちろん、実施前からも配慮しておく必要がある。
- けがについては、登山、基地づくり、自由時間の順に多かった。慣れない山道や雑木林での捻挫や擦り傷、自由時間の打撲などが多いが、骨折などの大きなけがは少なかった。危険を伴う活動についての指導が行き届いてきた結果と考えられる。

4 事故を未然に防ぐために

事故を未然に防ぐためには、ひとつひとつの活動について様々な安全指導や配慮が必要となる。例えば、危険性の高い基地づくりを安全に行うためには①服装、準備物の指導、②季節、天候を考慮した指導、③危険な動植物の確認や諸注意、対処の仕方、④用具等の使用方法に関する十分な説明と注意、⑤危険箇所の周知徹底・簡単な応急処置等の指導が必要である。

さらに、子どもたちの活動から常に目を離さず、危険な状況が起きる可能性を最小限に抑える必要がある。また、危険性の高い活動を安全にやり通すことで、危険を予測する力、それを回避するための判断力を培うことができる。自然体験活動で得たこのような力は、様々な場面で発揮され自分や周りの人の安全を守ることができる。と考える。

天ぷら油のキャンドル

～ 天ぷら油（廃油）でろうそくをつくろう～

領 域 つくる

活 動 自然物クラフト



＜準備するもの＞

天ぷら油（廃油）・廃油処理剤・キャンドルカラー（市販のもの）・ろうそく芯（燭糸）・紙コップ（ろうそくの型になる容器）・竹串・アロマオイル（天然香料）
フライパン（片手鍋）・ガスコンロ・ホーローの容器・はさみ・小刀・セロテープ・作業用手袋
※キャンドルカラーは、ろうそく専用の染料です。



＜作り方①＞

80℃ ぐらいに温めた天ぷら油（廃油）にキャンドルカラー（染料）を加え、色をつけます。
※加えるキャンドルカラーの量がポイント！あまり濃くせず、淡い色の方が光が透けるのできれいだと思いますよ！



＜作り方②＞

廃油処理剤を加え、よくかき混ぜる。
※加える量は、規定の1.5～2倍を目安に！
油が少し冷めてから、アロマオイル等の天然香料を数滴いれる。
※「アロマキャンドル」ではなく、廃油の匂いを和らげるために入れます。入れすぎ注意！



＜作り方③＞

ろうそく芯（燭糸）を垂らした紙コップ（ろうそくの型）に油を流し込む。
※ろうそく芯は、ろうそくの中心に真っ直ぐに垂らしましょう！
※何色かの層状のろうそくを作りたい場合は、1層ずつ固めながら流し込んでいきます。



＜作り方④＞

完全に固まったら、紙コップから取り出す。ろうそくの形を整え、芯の長さを調整すれば、できあがり！
※固まってからでも、小刀などで簡単に削れます。いろんな形にするのもおもしろい！
（注意！）火をつけた時の安全性を考えてね。



＜さらにひと工夫！＞

- ①ガラス瓶に流し込めば、これも素敵なキャンドルになりますよ。
- ②ろうそくの中にどんぐりや貝殻など自然の中で見つけた宝物を入れると、自分だけの秘密のろうそくになるね。（大きなもの、腐ってしまうもの、それから火に弱いものはダメだけどね…）

☆固まってしまった油は、熱を加えるとすぐに溶ける（液状になる）ので、固まりかけたからといって慌てて流し込まなくても大丈夫です。…くれぐれも火傷（やけど）などをしないようにね！それから火の用心にも気をつけてください。

平成 20 年度自然学校講座・研修会のご案内

■自然体験活動 1 日講座

対象者・定員	公立小・中・高等学校及び特別支援学校教員 40 名 (初任者研修及び 10 年経験者研修の校外研修として受講できます)		
期日及び 主な内容	第 1 回	自然・人とのふれあい ～実習・ゲーム指導等～	平成 20 年 6 月 24 日(火)
	第 2 回	自然とのふれあい ～実習・自然散策等～	平成 20 年 10 月 7 日(火)
	第 3 回	自然物クラフト ～実習・自然物クラフト～	平成 20 年 11 月 25 日(火)

・様々な自然体験活動についての技術や指導方法を学び、指導力をアップします。

■自然学校講座 (指導補助員養成コース・指導者スキルアップコース)

期 日	平成 20 年 8 月 23 日(土)～8 月 26 日(火) 3 泊 4 日		
対 象 者 定 員	大学生、一般県民、公立学校教員 (高等学校 10 年経験者研修として受講可) 及び南但馬自然学校登録指導補助員、自然学校救急員 30 名		
主 な 内 容	講義・実習 「自然学校のねらいと指導補助員の役割」「救急救命講習」「キャンプファイヤーの基礎」「野外炊事の基礎」「ナイトハイク」「自然体感ゲーム」「野外活動におけるリスクマネジメント」「自然物クラフト」「基地づくり」等		

※指導者スキルアップコースについては、1 講座のみの受講もできます。

《養成コース》
・指導補助員等としての基礎的な知識・技術を学びます。
《スキルアップコース》
・各自のニーズに応じた講座を選択し、指導力をアップします。

■自然学校出前講座

期 日	平成 20 年 5 月～平成 21 年 3 月		
対 象 校	公立小・中学校及び特別支援学校 (自然学校出前講座申請書で申請してください)		
主 な 内 容	自然学校に関すること ・自然学校の趣旨説明 ・事前相談 ・事前学習 ・事後相談 ・事後学習 ・保護者説明会 プログラムデザインに関すること、体験学習法に関すること 自然とふれあう手立て、人とふれあう手立てに関すること		

・本校の指導主事が学校や関係機関に出向き、自然学校・体験活動等の支援を行います。

親子で自然学校

～親子で南但馬を楽しもう～

- 第 1 回 平成 20 年 12 月 20 日(土)～21 日(日)
第 2 回 平成 21 年 1 月 24 日(土)～25 日(日)
第 3 回 平成 21 年 2 月 21 日(土)～22 日(日)

場 所 兵庫県立南但馬自然学校
参加費 食事代等が必要です。
申込み 事前に参加申込書をお送りください。
(参加申込書は各学校に配布します)
対象者 県内在住の小学生と保護者
内 容 自然散策、自然物クラフト、餅つき、
星空観察等

遊友体験活動事業

～感動！発見！を南但馬自然学校で～

- 第 1 回 平成 20 年 6 月 14 日(土)
里山トレジャーハンター入門
ー里山には宝物(トレジャー)がいっぱい！ー
第 2 回 平成 20 年 7 月 12 日(土)
里山トレジャーハンター：「めずらしい夏の生き物をさがそう！」
ー里山の宝物① 水辺(池)の生き物・昆虫編ー
第 3 回 平成 20 年 10 月 18 日(土)
里山トレジャーハンター：「きのこをさがそう！」
ー里山の宝物② きのこと編ー
第 4 回 平成 20 年 11 月 15 日(土)
里山トレジャーハンター：「秋の恵みをさがそう！」
ー里山の宝物③ さつまいも掘り・しいたけの原木づくりー

※天候により内容の変更や中止(警報発令時等)する場合があります。

場 所 兵庫県立南但馬自然学校
時 間 13:30～16:00
対象者 一般県民(子どもだけの参加は御遠慮ください)
申込み 事前に電話連絡してください。